

昔話に見る時間の異常さーこどもの成長の遅速を中心に してー

近藤良樹

1. かぐや姫・桃太郎のばあい

時間は、古典物理学では、どこをとっても等質・等速度で不可逆であり、万物に共通とされる。しかし、生活のなかで体験され感じられる時間は、速くなったり遅くなったりし、質的にも多彩で陰鬱で破壊的なものであったり、逆に最後の救いであったりと、各人に各様の流れ方をする。

昔話のなかには、その生きられる時間の多様さを一層強調した、ふつうとは異なる時間の感じられることがある。「浦島」のように異世界に行き来する際の時間的異常の話がその代表となろうが、本稿では、主人公（こども）の成長過程にしばしば見られる時間の流れの異常な話をとりあげてみたいと思う。

異常なはやさで成人してしまう話という、わが国では、「かぐや姫」や「桃太郎」がその代表格であろう。かれらは、竹や桃からうまれて、「いっぱい食べればいっぱいだけ」と日毎に大きくなり、まるで子犬がおおきくなるような感じで、超スピードで成人してしまう。この超スピードの原因は、これを語りつぐ人々の多様な世界観・人生観を通して納得されてきたものとしては、一つにとどまるものではなく、多様なものがあると見るべきであろう。

この超スピードは、まずは、ふつうの話であれば、成長過程の叙述の単なる省略であろうと推測される。語り手も聞き手も、「桃太郎」や「かぐや姫」の成長の過程の叙述はなるべくとばして、はやく、成人してからの冒険とか求婚の話にもっていきたいのである。かりに成長過程そのものに関心があるのであれば、それは省略することはない。「桃太郎」のばあい、誕生をめぐる興味をいだかれるところは、つまり、「桃」にかかわる点は、しっかりと語られるし、かぐや姫にしても、かがやく竹のなかに生まれているさまは、省略はされない。そのあとは、ふつうに成長するから、しいて語るものもないから、省略するということである。

「桃太郎」のばあいは、そういう省略とみることができる。しかし、「かぐや姫」は、どうもそうではないようである。よその子とくらべて速く、みるまに乙女に成長してしまうのである。『竹取物語』によると、竹から生まれたときは、「三寸ばかり」だったのが、「このちご、やしなふほどに、すくすくと大きくなりまさる。三月ばかりになるほどに、

よきほどなる人になりぬれば・・・」1)と三ヶ月で成人したというのである。瓜からうまれた瓜子姫にしてもそうである。お伽草子『瓜姫物語』によると、生まれてから「いくほどなく、年14、5にも見えければ」と急速に成長したことがいわれている2)。

柳田国男は、「桃太郎」も異常成長したのだという。これも、「急速に成長して人になった」「小さ子物語」であり3)、「驚くべき成長」は神の子だからなのだという4)。これらの話は、桃や瓜からうまれて「見る見る内に大きくなったと言う点が肝要であった」のだとも論じている5)。

とすると、神の子の典型であろう「一寸法師」は、どうなるのか。遅々として成長しなかったのではないか。親が絶望してしまうぐらいに、停滞していたのではないか。神の世界、天上での時間は、地上とちがって、超時間的で永遠であるか、時間が想定されるとしても、むしろゆったりながれるものとみなされるのがふつうであり、その世界から来た「神の子」ならば、一寸法師のように、永い時間をかけて、ゆっくり成長するものとみられるべきではないか。不老不死の仙人に近い「老子」などは母体に「72年」もいてのんびりしていたという話である6)。昔話でも「竹の子太郎」は、1234才でうまれてきたといわれている7)。

大体、この俗世に比べると、天国などのあの世は、時間の展開がゆっくりしているとみなされるのが普通である。天国では、3日だったのに、この世にかえってみたら、300年たっていたというようになっている。そういう天上の存在がそれに固有の時間において、この世にあらわれるとしたら、母体に100年、200年と言いたいのだが、そうになると、母の娘の娘の子などとなってしまう、話がややこしくなるから、たとえば10年ぐらい母体にいるということにされるのではないか。

「かぐや姫」は、天の子としては、ゆっくり成長してもよさそうだが、それでは、求婚者たちは、まちきれないし、育てる親も、たいへんだから、生まれるとただちに7歩あるいて「天上天下唯我独尊」といったとかいうお釈迦さんなどの早熟の方にくみして、異常成長を速い方の異常にもっていったということなのであろうか。

仏典あたりをうかがうと、人間界とちがい、天上界では、生まれるとすぐに5才とか10才ほどになる等といわれており8)、急速な成長が想定されていたようである。天は、人の願い・理想の表現がなされていると見てよいであろうが、かつては、新生児は無事に生き延びるよりは、死亡するほうが多かったことからいうと、一日もはやく、幼児期の死の危険から脱してほしいということが、そこには反映されているのだと考えられようか。か

ぐや姫なども、新生児が多く死亡していた時代の願いをふまえて、そこをさっと通りぬけて夭折をまぬがれて無事成人していくということになっているのかも知れない。

かぐや姫も瓜姫も人間ならぬものから生じるのだが、その点からいうと、つまり竹とか瓜から生まれることに力点をおくと、またべつのが考えられる。「たけのこ（竹の子）」は、急速に成長する。竹から生まれたかぐや姫は、竹の精ともみなされるから、「たけのこ」が1、2週間もすれば青々と伸び尽くすように、「三ヶ月」で乙女に成長したとしても不思議はない。

植物のみか動物も、人間にくらべて成長ははやい。われわれの昔話では、人と本物の動物との結婚は、ヨーロッパのメルヘンとちがって、平気であるが、きつねとのあいに生まれたきつねの子なら、早々に成人したはずであろう。『今昔物語集』によると、「賀陽の良藤」は、狐にたぶらかされて、この狐の婿になり、こどもももうけて13年たっていると思っていた。家人が行方不明になった良藤を捜索していたら、なんと縁の下の狐の巣のなかにいた。そこで13日すごしたただけと後でわかった。13日のあいにこどももでき、それが大きくなっていったということになる9)。

さらには、動物は、人間よりも、神に近い存在とみなされ、古くは、神そのものともみなされていた。神＝動物としては、神の子は、動物の子として、動物のように、すみやかに成人（成神）するものとも考えることもできる。

2. こどもの成長のはやいこと

家庭のなかでの比較においては、ふつうの人の向上＝成長に比して言えば、とくに幼児期の成長は、その成長率が、そうとうなスピードであり、このことも、桃太郎たちの異常な速さの成長を不自然と感じさせない理由のひとつであろう。

幼児の成長における時間は、きわめて活発で、日に日に賢くなり大きくなっていくのであり、大人の時間は、それに比していうと、停止しているといってもいいぐらいであろう。大人の感覚からいえば、こどもは、「いっぱい食べればいっぱいだけ」と、大きく成長しどんどん変化して行き、毎日の時間の流れのなかに、多彩なものをつぎつぎにきざんでいつているのである。

同じ物理的時間のうちでも、こどもでは、多彩多様なものがきざみこまれているのに比して、大人のそれには、ほとんど記されるものがないとすると、大人では、すこししか時間がながれていないのに、それを基準にしてみるばあい、子供においては、速くたくさん

ながれているものとみなされることになるであろう。

ただし、こども自身は、急速とは感じていない。こどもの頃を思い出すと、急速にすぎたとは記憶してはおらず、むしろ夏休みなどたいへん長かったものとして想起する。大きくなっての同じ長さの夏の方が短く、こどもの頃のものが長かったと感じられるのではないか。

こども自身にとって体験中の夏休みがながいのは、かれらの計画性の貧弱さにおうところが大きいであろう。大人のばあい、未来にむかって、この夏は、ひと仕事しようと欲張った計画をたてるから、つい時間不足となり、短い夏と体験してしまう。だが、こども自身は、親に強制されるのでないなら、さして遠大な企画はもたない。せいぜい、2、3日さきのことを描くぐらいであろう。そういうさきのことについての計画的時間配分ということでは、長い夏はひまをもてあそばして、長いのであり、「長い」という意識が記憶に残れば、「長い一夏」となって想起もされる。

また、過ぎ去る時間の方面からいうと、「一昨日は、はじめて新幹線に乗った」、「きのうは、海へいった」と記憶すべきことがいっぱいならんでいて、もう夏休みのはじめに体験したことにまでさかのぼるのにも、日記帳を何枚もめくりかえす必要があるようになっていて、遠い過去になっているということも、長い夏という体験につながっているのではないか。この点では、おとなは、一昨日も昨日も同じことの繰り返して、ことさらに記憶されるようなことはなく、一月前をふりかえっても、その間、空白であれば、短い夏となる。

というようなことであれば、「桃太郎」の話は、その成長過程が短く描かれているのは、かりに普通のこどもの成長だったとしても、主としてそれは、親の方の体験に見合ったものだというべきであろう。アイヌの昔話のように、語り手自身が一生をふりかえってその体験談をするという形式をとるところでは、こどものころを想起した話は、むしろ長くなることであろう。桃太郎のように急速に成長するというのが叙述の省略ではなく体験の事実だとしたら、それは、かれの親の立場からの体験談になっているのだというべきである。親の十年一日のような何の変哲もない短いものと想起される時間に、こどもは成長したのであり、それを想起したとき、その親の短い時間に急速なめざましい成長をしたと感じられるということなのである。

3. 一寸法師のばあい

「桃太郎」や「かぐや姫」のように異常に速く成長する話とともに昔話には、異常にゆっくり、あるいはほとんど成長しないで過ぎていく話がある。神の子のいわゆる「小さ子」物語に属する「一寸法師」や「たにし長者」がそうである。かれらは、異常に小さく、異常に停滞して過ごす、現実的な話にひきつけていけば、成長を阻害された停滞児である。だが、その成長の時間がとまっていたような小さ子が、やがて大変身をとげて、大事をなすのである。

かれらの成長のスピードが「遅れている」のは、この世界の普通の人間に比べてということである。生まれもそうだが、生まれてからのありかたが異なるわけである。「一寸法師」も「たにし長者」も、神に祈願してさずかった正真正銘「神の子」である。その神的な子が、長久の神の世界のあり方のままにゆっくり成長する姿が、普通の人間には「遅延」に見えたのであろうか。

やがて、神的な存在として大成するのだとわかっておれば、その遅延は、肯定的に「のんびり」「ゆったり」とした時間的成熟にとらえられるであろうが、並みのこどもとして見たときには、否定的に悲観的になる。「おくれ」であり、並みの成長をのぞむ親には、「あせり」となる。成長に遅延のみられるこどもの将来を思う親の焦りは、時の経過とともに、しだいに絶望へかわる。

「一寸法師」のばあい、親は、かれの旅立ちを、桃太郎のばあいのように喜んで見守ったのではない。「はや12, 3になるまで育てぬれども、背も人ならず・・・ただ化物風情にてこそ候へ・・・夫婦思ひけるやうは、あの一寸法師めを、いつかたへもやらばやと思ひける・・・」と追い出したのである¹⁰⁾。一寸法師の親は、ひょっとしたら、かれを殺したのかもしれない。神からのさずかりものを神に返したのではないか。としたら、はなやかな京へ旅立ったとは、せめて来世ではめぐまれた生であってほしいという、悲しい親の願いになるのであろう。

一寸法師は、「御器と箸」¹¹⁾でもって川を都へとのぼっていく。箸や茶わんを渡したとは、もう食事をともにしないこと、とわの別れを決意したということである。いまでも棺桶を家からだすとき、死者の生前の茶わんを割る。逆に、死んだかもしれないものであっても、この世でふたたび食事をともにしてともに暮らしたいというのであれば、「かげ膳」をしてこれを待つぐらいであって、一寸法師は、死んだから、あるいは、「死ね！」とばかりに、「御器と箸」を渡されたのではないか。だいたい、「おわん」は舟には不向きだし、箸も、櫂にはなりにくい。さらには、一寸法師の故郷、大阪（難波・住吉）あたりか

らであれば、京都は上流にあるのだから、自力で進むのはむずかしい。不自然な話である。川は、この世からあの世への通路だったと民俗学ではいうが、それなら、一寸法師が不自然にも川を上るのが理解しやすくなる。死出の旅だったのであろう。あの世の都へと川を昇っていったのであろう。

一寸法師の親が冷酷なのではない。重度の障害児をもった親は、今日でも、絶望のなかでは、「死んでくれたら」と思うにちがいないし、その苦勞・苦悩にむくわれることのないとき、愛にも陰りがでてくるのではないか。いな、愛しければ愛しいだけ、「死なせてやりたい」、「心中を」などと思うものであろう。もちろん、そういう絶望の時期をのりこえて育てあげていく親からいうと、一寸法師の京への旅立は、親自身が、ちがう世界観に至っての、違う世界の可能性を描きはじめたということになる。

こういう悲しいことや、絶望・諦念等という話ではなく、ゆっくり時間をかけながらも、確実に成長していくタイプもある。いわゆる「奥手」である。「桃太郎」は、早稲の方になり、「一寸法師」などは、ごく奥手になる。停滞し遅延しているものなかには、現代の規格品の大量生産のシステムにのりきれないで、自分だけで、自分の成長速度でという者がおり、ゆっくり「まゆごもり」してという者もあって、むしろ、そういうふつうの成長速度のベルトコンベアから落ちた者のなかから、「一寸法師」のように大成するものが出てくるのである。

「大器晩成」というが、大器は、しばしばゆっくりと流れる時間のなかで育ってくる。「燕雀なんぞ鴻鵠の志を知らんや」というが、大きくはばたくものには、長い滑走の時間が必要なのである。生物の進化飛躍においては、せせこましく器用に順応して特殊化（進化）したものは、次の時代にはほろびていくが、不器用に原始的なままにとどまっていた種は、ときに、融通がきいて飛躍が可能になるという。人の成長でもある程度そういうことがいえるように思われる。のびのびとたっぷり時間をかけて、あるいは諸事情から既成の型にはまることなく、したがって、しばしば停滞的にすごして成長していくものなかから大成するものが出てくる。

神の子は、その世界の永遠性の性質をある程度はもって生まれてくるということであろうか、母親のお腹にもふつうより長く入っているといわれることがある。成長もそういう点からいうと時間がかかり、ゆっくりと育つことになるのであろう。神の子の「一寸法師」が発育不全としかみえないようなゆっくりとしたこども時代をすごしたのは、神的存在の印しとみなされるべきかもしれない。しかし、親からいうと、そうのんびりしたもので

はなかった、絶望的な遅延と思われていたのである。

4. 遅々として進まない、いやな時間

充実し楽しいときは、われを忘れていて、時間は「あっ」というまに速く過ぎ去っていくが、その反対だと、つまり、退屈していたり、絶望しているときは、時間は、遅々として進まないものと感じられる。かつ、あとでその時を想起するときも、退屈してなにもなく空白で無為にいたからといって、短いものとはならず、長い遅々とした時間だったと感じる。

われわれの「ものぐさ太郎」の話は、「三年寝太郎」などともいわれる。怠惰に退屈して無為に過ごす「ものぐさ」は、まめに生活を営んでいるものの日々がスピーディーに過ぎていくのに対して、遅々とした時間のあゆみになる。長い年月をしめす「三年」ものあいだ、ものぐさ太郎は、無為にすごしたということであろう。昔話には、「白雪姫」や「眠れる森の美女」等の、異常な時間停止をもつものがたくさんある。これは、お姫さまを長いあいだ「塔」ととじこめたりする話とも共通のものがありそうで、塔にとじこめる話は、フレーザー『金枝篇』によると 12)、どうも各地の古い習俗の事実だったようで、わが国でいえば、「月経小屋」に女性をその間、隔離していた史実に重なる。隔離され無為に過ごす時間は、遅々としていて、いうならば時間が停止していると表現されるようなものになっていたのであろう。

退屈・倦怠では、することがなくて、時間をもてあまし、本来はなにかでうめられるべき時間がうまらずにいて、それが余っている状態なので、時間がたくさんありすぎるということになる。さらに、そういう無為の時間からは、のがれたいのであり、はやくそのあきあきした時間が過ぎ去ってくれることを待遠しく望んでいるのであるから、等速な物理的時間は、相対的には遅く流れていくように感じられることになる。

絶望しているばあいも、ふつうは時間は長く感じられる。自分にとって未来とその希望は、絶たれていて、そこにはのりこえられない壁がたちふさがっているのである。絶望の時間は、未来へと流れるのをやめて、暗黒のなかで停止しているかのように感じられることになる。一寸法師の親は、絶望していたのであれば、時間は、重々しく長く停滞的に感じられていたことであろう。

鬱病においては、鬱々としてその動きを停止した自己のもとで、自身の時間は未来にすすむことをやめて、その暗々として憂鬱な時間停止の状態に永遠に閉じこめられているか

のように感じられるという。あとで想起するときは、何もなく無為だったのであれば、想起の材料はないから、短い想起となり、短い時間と感してもよさそうだが、そうはならない。そのつらい停滞のなかでは、つねづね時間が遅々としてすすんでいかないと感じていて、そういう色づけ・意味をその時期にあてはめ、長いつらい、牢獄にとじこめられていたような日々として想起することになるから、その絶望の時間は、想起においても長い遅々としてすすまなかった時間となる。一寸法師の親もそういう時間を感じていたのではなかろうか。

ただし、特殊な極限状況下の絶望においては、感覚される日々の時間は、長く停滞的だが、一週間とか一ヶ月の長さは、逆に、ごく短く感じられるような場合もあるようである。ナチスのユダヤ人種絶滅で周知の「アウシュビッツ」から奇跡的に帰還したフランクル (Viktor E. Frankl) は、その体験談 (『霧と夜』 (原題 Ein Psycholog erlebt das Konzentrationslager)) のなかで、収容所での重労働の一日一日は、とても長く感じられ、死のみしか残されていない絶望のもとでのこと、一週間の方は短く感じられて、それをまわりのものに言ったら、みんな、「収容所では一日の長さは、一週間よりも長い」ということに同感していたと記している¹³⁾。苦悩の重労働は延々と続き、それのおわる夜は待ちこがえられるから、その間が長く感じられるのは、よく分かる。逆に、死のみしか残されていない徹底的に絶望的な未来へは、時間そのものが展開せず、無化していたのであろうか。一週間や一ヶ月あとではなく、「明日、いな、今夜殺されるのかもしれない」日々で、未来は、明日すら存在せず、端的な無に、無という最短のものになっていたのであろうかと思われる。ふつうの絶望は、そうだとしたら、甘く、どこかに希望が残っていて、未来への道が細々とではあろうが確かに存在し、それを待ちこがれることが許されているから、遅々として時間が進んでくれないと、時間の遅延を感じるようになっていたのであろう。

5. あの世が永遠な理由

かぐや姫や一寸法師は、神の世界に由来するがゆえに、その成長の時間に異常さがでてきているように思われる。かぐや姫は、実は、天女であり、歳をとらない (「老いをせずなむ」¹⁴⁾) 天上の月の都へと帰っていった。有限で生老病死のあるこの世界に対して、天国などは、ゆったりしていて永遠の生を保っているかのように考えられることが多い。天国は、もちろんだが、地獄もそのようである。

仏教の方では (『俱舍論』にみると)、たとえば、人間界の50年が四天王天の1日であ

り、後者の500年が等活地獄の1日になる、あるいは、人間界の1600年が他化自在天の1日であり、後者の16000年が焦熱地獄の1日に等しいといった勘定になるようである(15)。天国より地獄の方がゆっくりしているのは、地獄の苦しみの長いことを強調するためであろうが、それは、また、楽しいことに比して苦しい時間の方が長く感じられるという現実にも見合っている。いずれの世界もこの世の人間界に比しては、永遠の世界のようにゆっくりとしか時間は流れないものと想定されている。

では、どうして、あの世は、そうなっていると考えられるのだろうか。あの世から生き返ってくる人があれば確かな話になるが、臨死体験者の話は、ほんの入り口で引き返したもので、あまりあてにならない。が、何年もあの世にいて、帰ってくる人が、実は、あるのである。夢のなかに出てくる死者たちがそれである。かつては夢は、現実と同等の価値をもつものとみなされていた。それは、ひとがかつてにでっぴあげた想像図・自由に描ける妄想の図とちがって、もうひとつの明確な感覚世界であるから、信頼できたのである。その夢に何年も何十年も前に死んであの世にいった人が、ぜんぜん歳とらずに帰ってくるのである。天国へ行った人も、地獄へいったはずの人々も、同じように歳をとらないで帰ってくるのである。ということであれば、あの世は、歳をとることがない永遠の世界にちがいないということになる。プリミティブな人々のあいだでは、こういう夢の体験が、あの世を永遠と感じざるをえない一番大きな理由になっていたのではないかと。

神々の永生のばあいは、また別で、主要には、抽象的存在なので肉体的な生成消滅の具体性をもつにいたらないという、ごく消極的な理由において、これらが永遠の存在とされてしまったのであろうと思われる。動植物の霊などにしても、抽象的観念として成立しているのみなので、個物的生存の形式を、つまり生老病死をもつにいたらないのである。これらの抽象的観念的な神的存在は、現実的な時間経過という具体性を欠いているだけなのだが、それゆえに、これを現実のなかへ引き込むと、生老病死の欠けた、永遠の存在とみなされることになるのである。神や霊の時間的変化ということへの想像の欠如、想像力の貧しさと、抽象的観念と具体的現実をしっかりと区別することのできない短絡的単細胞的思考が、神や霊を永遠の存在にってしまったのであろう。

かぐや姫は、その永遠の国に帰っていったというから、竹からうまれてのこども時代とは逆に、その後は、ゆったりと生きつづけたことであろう。桃太郎は、犬・猿など動植物の仲間ということであれば、早死にしたことになる。しかし、「桃」の子としては、桃は生命の源とみなされていて、これを食べると若返るといふようなことがいわれるから、ある

いは、そういう方面の縁者ならば、その後、くりかえして周辺の「鬼」たちのところへ遠征して、彼らの長い間の悩みのたねとなりつづけたことであろう。神の子の「一寸法師」や「たにし長者」は、神的世界の時間のもとにゆっくりと育ったのだとしたら、その後、おそらくは、そうとうに長生きしたのではないかと想像される。ゆっくり育って大成したかれらは、ゆったりと天長地久の生き方をしたのではなかろうか。

註

- 1) 『竹取物語』(『日本古典文学全集』 第8巻 小学館 1972年 5 1頁以下)
- 2) 『瓜姫物語』(『日本古典文学全集』 第36巻(『御伽草子集』) 小学館 1974年 488頁)
- 3) 『定本柳田國男集』 第8巻 筑摩書房 昭和37年 20頁
- 4) 同上 第8巻 82頁以下
- 5) 同上 第30巻 昭和39年 154頁
- 6) 『神仙伝』巻一「老子」(『中国古典文学大系』第8巻 昭和44年 3 45頁)
- 7) 『日本昔話大成』 第3巻 角川書店 昭和53年 124頁
- 8) 桜部建『仏典講座18 俱舎論』 大蔵出版 昭和56年 121頁以下 参照
- 9) 『今昔物語集』巻第16の第17話(『日本古典文学全集』 第22巻(『今昔物語集2』) 小学館 1972年 247頁参照)
- 10) 『一寸法師』(『日本古典文学全集』 第36巻(『御伽草子集』) 小学館 1974年 395頁)
- 11) 同上書 396頁
- 12) cf. James George Frazer ; The Golden Bough. edited by Robert Fraser. Oxford University Press. 1994. Book .Chapter2. (The seclusion of girls)
- 13) ヴィクトール・E・フランクル『夜と霧』 霜山徳爾訳 みすず書房 1986年(初版1961年) 173頁
- 14) 『竹取物語』(『日本古典文学全集』 第8巻 小学館 1972年 1 01頁)
- 15) 桜部建『仏典講座18 俱舎論』 大蔵出版 昭和56年 121頁以下参照